

なぜマンガを研究するのか？ 身近すぎるが故に気付かないマンガの影響力

京都精華大学

理事長

吉村 和真様

2001年より京都精華大学に所属

2024年12月より現職



京都精華大学は、1968年にリベラルな政治学者であった初代学長岡本清一を中心に「京都精華短期大学」として開学され、1979年に4年制大学として美術学部を開設。教育理念である「人間尊重」「自由自治」を基盤として、全国初のマンガ学科の設置や京都国際マンガミュージアムの開設・運営など、表現を通じて社会に貢献する人の育成を重視されてきました。今回は2024年12月に新たに理事長に就任された吉村和真様にお話を伺いました。

マンガ研究の黎明期と 全国初のマンガ学科設置



ンガは今や、日本が世界に誇るカルチャーとして国際的にも注目を集めています。京都精華大学でのマンガ教育は京都精華短期大学が1968年に開設されてからわずか5年後の1973年に、美術科の中のデザインコースのクラスとして始まりました。そこから2000年に設置されたマンガ学科、2006年に設置されたマンガ学部と、既に50年を超える歴史があります。

京都精華大学には、個人の表現であると同時に、それを他者に訴えかけて社会や世界を変えていく、行動する表現者というコンセプトが設立当初から存在し、それが「自由自治」「人間尊重」という理念に通じています。その中でアクチュアリティのある

表現として、新聞や雑誌に描かれた政治風刺マンガや似顔絵が世論を動かしたり、その時の政治状況を表したり、社会的に無視できない存在だと、マンガが持っている批判精神のような部分も含めて注目していました。ただしその当時は、まだ「マンガ」という単語には大学や学問とは縁遠い印象が強く、マンガクラスという名称を用いることに学内でも賛否両論があったようです。

マンガクラスは、1970年代に大人向けの政治マンガにフォーカスするような形で始まりました。子供向けのストーリーマンガを扱うのはまだハードルが高かったため、美術の領域でイラストに近いような存在としてマンガを扱い、カートゥーンというジャンルがメインでした。ここで少しマンガの歴史に触ると、1959年に『週刊少年サンデー』『週刊少年マガジン』が創刊され、60年代の後半に差しかかるとそれらを読んでいた世代が、大学生や若手のサラリーマンになってもマンガを卒業しない、ということが起こってきます。すると、読者の世代上昇を見据え、出版社も青年マンガを60年代後半に、70年代には大人向けのマンガも増やしていきます。つまり、大人をマンガの市場から退出させないような環境ができるわけですが、結果的に昭和が終わる1980年代末には少年少女マンガよりも、青年誌や大人誌のマーケットの方が大きくなるという状況になりました。こうした潮流の中で、京都精華大学が扱うマンガ分野というものは、ストーリーマン

ガを外すことはできないと以前から考えていた背景もあり、マンガ学科の設置に踏み切ることになります。ここで私自身の経歴とも結びついてきます。もともと熊本大学で手塚治虫をテーマにした卒業論文を書き、1996年から立命館大学大学院で学んでいたのですが、手塚先生の著書を通じて、京都精華大学が日本で唯一マンガについて教えている大学であるということを知っていました。その後、日本学術振興会の若手研究員時代に、マンガ学科の設置を記念したシンポジウムが開催された際に京都精華大学に初めて足を運び、教職員の方とご縁ができたこともあり、2001年に京都精華大学の表現研究機構マンガ文化研究所に着任しました。京都精華大学がストーリーマンガに視野を広げたことと、私自身がマンガの研究をしてきた道のりが交差した瞬間でした。

マンガ学科にはカートゥーンコースとストーリーマンガコースという2つのコースがあり、本当に学生が集まるのか心配もありましたが、社会的に大変注目を集めて学生募集も順調でした。そうした経緯もあって2006年には早くもマンガ学部に昇格します。マンガ学部はマンガ学科に加え、編集者やクリエイター周辺の人材を育成するマンガプロデュース学科、アニメーション分野の人材を育成するアニメーション学科と、3学科体制でいっそうマンガの教育と研究ができる環境が構築されました。

京都国際マンガミュージアムの開設 「図書館より図書館らしい場所」

マンガに関する研究や学会の活動を通じ、先行研究の整理や様々な文献が読める資料館のようなものを作る必要性を私は感じていました。そこで2003年頃にマンガ学科の設置に尽力された牧野圭一先生と本格的に進めることとなりました。まずは、できれば京都の街中に資料館を作れないかということで京都市へ相談にいったのですが、最初はけんもほろろといった状態でした。候補地となった閉校中の小学校がある地元の方にアプローチした際には「なんでマンガなんや！」と言われたこともありました。これが契機となって事が動き出しました。柔らかく断られていたら取り付く島もありませんでしたが、相談相手の感情が揺れ動いたことで楔が打てる隙間のようなものが生じたのです。京都では「番組小学校」というものがあり、幕末から明治への転換期に京都は人材育成に力を入れ、全国の学校制度の創設に先立って学区制の小学校を作りました。その学区(番組)による小学校は地域の人々が土地や資金を供出して作り上げてきたという経緯もあり、非常に地元の方々の思い入れがある場所でした。そんな場所にマンガの施設を作るということで、自治会のみなさんも先のような反応だったのですが、少しずつ説明を重ね、様々な人間関係を構築しながら、地域の方々が大切に守ってこられた小学校の校舎をお借りし、マンガの力でもう一度子供た

ちが集まってくれるような場所にしたいという思いを粘り強く伝え、実現にこぎつけました。

当時の文化庁の長官であった河合隼雄先生がマンガに関心をお持ちだったことも幸運で、マンガミュージアムの設立のためにご尽力いただいたことも大きな助けとなりました。特に覚えているのが、設立にあたってのプレシンポジウムで、現在のマンガミュージアムの建物で講演をされた時のことでした。先生いわく「世の中に色んな美術館、博物館というのがある中、それは国立や県立であっても、お上が作ると決めたから作ったものが多い。ところが京都はそうではなく、地元のみなさんが自主的に作り上げていく」という伝統がある。小学校という地域住民がずっと愛着を持ってきた建物で、しかもマンガという新しいものを取り入れるという、まさしく進取の気風。いかにも京都らしい場所、取り組みだと私は思います」ということでした。これを聞かれて、地域のみなさん、関係者の方々の思いが一齊に腹落ちしたようで、「ストーン」という音が聞こえるような空気の変化を感じました。そこからはものごとが加速度的に進み、開館直前まで突貫作業をしながら、構想の着手からわずか3年後となる2006年11月に、京都国際マンガミュージアムを何とか開館することができました。

京都国際マンガミュージアムには特徴的な風景があります。それは小学校の校庭だった場所に地元のみなさんが芝生を寄贈していく、そこに座ったり寝転んだりして自由にマンガを読んでいる風景です。誰かが促

したことないですが、階段や地面にも座って読むなど、マンガが気軽に読める空間が広がっています。オフィス街に突如現れたまるで天国のようなその光景は、今ではマンガミュージアムの魅力を伝える一番の売りとして発信できるようになりました。

初代の館長である養老孟司さんはマンガミュージアムのことを「図書館より図書館らしい場所」と仰っていました。「図書館には私語厳禁とか静かに読もうという貼り紙があるだろう。あれはああしないとうるさいから貼ってあるんだよ。だけどマンガミュージアムでは、私語どころか周囲で子供たちがキャーキャー騒いでいるけどマンガを読んでいる人は誰も文句を言わないだろう。つまり、読んでいる人が集中していれば周囲の声は耳に入らないんだ。好きなものを好きのように読んでいる場所では、いちいち私語厳禁なんて注意する必要がないんだよ。だからマンガミュージアムは図書館よりも図書館らしい場所なんだ」と。

加えて私は、小学校の校舎を利用した建物であること、マンガミュージアムの魅力だと考えています。子供の頃にマンガを読んでいて怒られた記憶のある小学校という場所で、堂々とマンガを読めることが楽しいのでしょうか。結果的にこの2006年は、4月にマンガ学部の開設、11月に京都国際マンガミュージアムの開館という、京都精華大学にとっての教育と研究と社会連携の場を包括的に兼ね備えた年となりました。

研究対象としての「マンガリテラシー」

これまで「なぜわざわざ大学でマンガを教育や研究の対象とするのか？」と何度も質問されました。でも、その質問が出れば出るほど「だから研究するのです」と答えています。歴史学とか経済学とか医学に対しては「なぜわざわざ大学でやるの？」とは言わぬいですね。それは大学という制度が学ぶべき対象を選んだ結果であって、マンガにその価値があるかどうかとは別の力学が働いているからです。一方、マンガはあまりにも身近な存在であるということが挙げられます。今の日本では、マンガやアニメ、絵本やゲームなど、日常的にマンガ的な表現があふれていて、例えば、生まれてから小学校に上がるまでには必ずアンパンマンやドラえもんに出会います。私はこうした環境を象徴的に「ドラえもん包囲網」と提唱していますが、学界でも全然定しませんね(笑)。また、私は「マンガリテラシー」と呼んでいますが、日本に住んでいると、マンガの読み書きに関わる様々な能力を、幼い頃から気付かぬうちに身に付けることになります。コマの運び方や吹き出しの形で何を表しているかなど、誰かが教えてくれる訳ではないのに、いつのまにか身に付いています。それは「母語」の習得に近い能力です。私たちにとっては日本語になりますが、母語とは自分が覚えた過程を説明できない言語のことです。日本語をいつどうやって覚えたかを説明するためには、日本語を覚えていない頃の自分を思い出す必要がありますが、すでにその問いを日本語で考えている時点

で不可能なのです。

そして、気が付いたら使用している言葉に、人間は思考やイメージ、価値観など広く深く影響されています。私はそういった母語と同じレベルでマンガを捉えています。マンガは決して簡単な表現ではなく、絵や言葉やコマなど、様々な要素が複雑に組み合わさってできているのですが、それをいつも簡単に読んでしまえる能力をいつの間にか身に付けてしまっているので、「マンガは簡単だ」「マンガは子供でも読める」となり、「なぜわざわざ大学でマンガを扱うのか？」という質問につながるわけです。

マンガ学部には多くの留学生がいますが、日本語は漢字・ひらがな・カタカナ・音読み・訓読みと複雑で、習得するのが非常に難しいと口を揃えます。でも、日本に生まれ育てば、小学校に入る頃には国語のテストで100点を取れなくても国語の授業が理解できるくらいには、日本語の読み書き能力を身に付けます。それと同じような観点でマンガをとらえた時、日本語の教育や文学の研究は多くあるのだから、マンガでもできるはずだという考えにいたるのです。

取捨選択の基準を変えると見えてくる、図書館にマンガを置くことの意義

近年、学校や地域の図書館にどんなマンガを置けばよいのかという、質問を受けることが増えました。これを考えるには、前述の「なぜマンガを研究するのか？」という問いの意味を踏まえたうえで、作品の歴史的位置づけや子供たちに与える影響を考慮す

る必要があります。ただし、そのための基準は一筋縄ではいかないでしょう。本学の元学長である竹宮恵子先生は「18歳以下禁止などの年齢制限が世の中には存在するが、逆に12歳までに読んでほしいマンガとか、18歳になる前に知っておいてほしいマンガ、といった選び方もできるのでは」と興味深い発言をされました。何を排除するかではなく、何を採用するかという観点で取捨選択の基準を変えてみると、どんなマンガを図書館に置くのか、今後の図書館の意義や役割はどこにあるのかなど、マンガミュージアムとの比較も含め、いろんなヒントが見えてきます。

今後の図書館の役割は、社会と学問・教育の現場がつながる拠点であること

一昔前は、大学図書館は象牙の塔の一部のような印象もありましたが、現在では社会から見られるものですし、開かれるべき存在になっています。学問や教育の現場と社会が互いに開いてつながっていけるような仕組みが、大学を含む教育現場が生き残るために必要となるでしょう。多くの分野で人手不足が叫ばれる中で、大学の図書館や地域の図書館はこれまで以上に重要かつ有用な拠点になってくると予想しています。

ここで「わからない」という言葉についてお話ししておきたいのですが、私は「わからない」には2つのタイプがあると思っています。わからないから諦めるというタイプと、わからないから何か面白そうというタイプです。大学がその後者をどれだけつかんで

いけるかが重要だと思います。そのためには専門的な知識であっても、それをわかりやすい表現や親しみやすいメディアによって、うまく周知していくことが求められます。そのためのツールとして、マンガは仲介役のような役割も担えるでしょう。知識や情報をわかりやすく伝えるうえでマンガは非常に便利です。ただし、エンターテインメントとしての面白さだけではなく、コミュニケーションツールとしての難しさも一緒に考えていく必要があると感じています。ここにも「マンガリテラシー」の影響が関わってきます。

縁が紡いだ描き下ろしの水彩画 「自由の学び舎」

この水彩画は『この世界の片隅に』などの作

者、こうの史代先生に個人的に依頼して描いていただいた作品です。マンガ研究を通じてご縁ができたのですが、この作品を依頼するうえで、2つのポイントがありました。1つは、京都精華大学のキャンパスを舞台にしてほしいということ、もう1つは、異なる作品の主人公2人と同じ絵に入れてほしいということでした。後者は作品の設定や世界観が異なるため、失礼にあたるかなと心配したのですが、こうの先生はご快諾くださいり、2人だけではなくさらに別の作品の登場人物も描き足してくださいました。タイトルも「自由の学び舎」と、京都精華大学の理念である「自由自治」をうまく入れていただき、「あの戦争がなかったら」という想像力のもと、好きなことを多様な人たちと学び合えることがいかに尊いのかを表現していただきました。私が理事長に就任

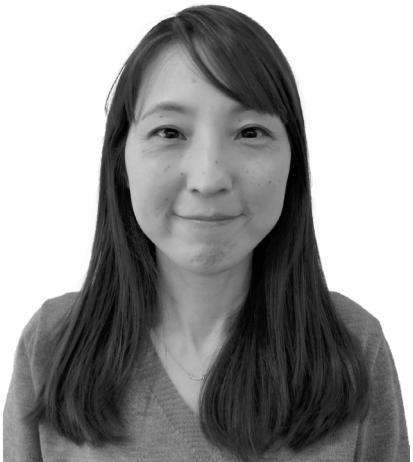
した際、新役員の挨拶状にもこの絵を掲載しました。一人でも多くの方に観ていただきたい、とても大切にしている作品です。



こうの史代「自由の学び舎」(2021年)

■ Staff Interview

“誰かが気持ちよく過ごせるように”を大切に。 経験を活かし、新しい形で“支える”職種へ



小島 紀子さん
Kojima Noriko
東京都港区内の大学で勤務
2024年～

最

初、キャリアパワーのことを知ったきっかけは、インターネットの求人です。登録の際、私の状況や希望に合わせていくつか提案してくださったのですが、「お子さんも小さいですし、無理のない範囲で働くところはここですね」と言って、親身に相談に乗ってくださいました。通勤の負担や働き方にまで気を配ってくださったことが印象的で、その温かさに惹かれてここでお願いしようと決めました。

図書館から総務へ。新しい挑戦

最初は現在の勤務先の大学図書館で働いていたのですが、家庭の都合で今後の働き方について営業の方に相談したところ、ちょうど総務で求人が出ていると紹介していただきました。大学の雰囲気も好きでしたし、スタッフの方々も本当に温かい方ばかりでした

ので、ぜひ挑戦してみたいと思い、図書館から総務へ職種を変えて働くことにしました。現在は伝票処理や代表電話の対応、式典サポートなど、大学全体を支える幅広い業務を担当しています。伝票処理は、請求元がさまざまな部署に分かれしており、少しづつ違いがあるのですが、間違いに気付いて連絡すると「気付かなかつた、ありがとう」と言つていただけることもあります。やりとりが励みになっています。皆さんとても穏やかで、大学全体の雰囲気も落ち着いているため、私も「もっとお手伝いしたい」という気持ちで仕事に臨むことができています。図書館では学生の方とやり取りすることが多かったのですが、総務では職員の方とのやり取りが中心です。過去に経理を経験したことがあり、これまでの経験を活かしながら、新しい環境でやりがいをもって働けています。

仕事で心がけていること

仕事に限らず、周りの人が気持ちよく過ごせるようにすることを一番大切にしています。友達や家族など、身近な人が穏やかに明るく過ごせるように——その思いをいつも心に持っています。仕事も同じで、職員の方が穏やかに、円滑に業務を進められるように、常に自分がどう動けば良いかを考えながら働いています。例えば、職員の方から「急ぎではない」と言われた仕事でも、自分の手元に急ぎの作業がなければ、優先して対応するようにしています。そうすることで、相手の時間配分や仕事のペースに合わせられ、結果として全体の業務がスムーズに進むよう心がけています。

また、仕事中に特に気を付けていることがあります。まず、総務で代表電話を受ける際は、派遣という立場ではなく「大学の顔」として対応することを意識しています。そして、どんな小さなことでも必ずメモを取り、聞き漏らしのないようにしています。指示を受けた内容を再度確認する場合

も、単に「どうしたら良いですか?」と尋ねるのではなく、「以前こうした際にうまくいかなかつたため、今回はこうしてみようと思いますがいかがでしょうか?」と、自分の考えを添えて質問するようにしています。この姿勢は、新卒時代の先輩の教えから学んだものです。質問をした際に「私の顔も三度までだから、次はないよ」と言われたことがあります。それ以来、「一度で理解し、相手の時間を無駄にしないこと」を意識して働くようになりました。派遣社員として即戦力を求められる立場だからこそ、この姿勢を大切にしています。

報告・連絡・相談を徹底

別の部署の方から問い合わせを受けた場合、自分で判断できることはその場で回答しますが、その後、必ず社内メールで情報共有を行います。小さな対応でも必ず共有し、やりっぱなしにしないようにしています。処理の確認や修正は迅速に行われており、誤りや確認事項があればすぐにフィードバックがあります。その指示をメモして請求元に電話をかけ、再確認をして正しく処理する——その積み重ねを続け、失敗を重ねながらも少しづつ学んでいます。

キャリアパワーで働く中で一番良いなと感じるのは、「人の温かさ」です。営業担当をはじめ、電話で応対してくださった方も皆ん話しやすく、相談しやすい雰囲気でした。困ったことがあっても必ず支えてくれるという安心感があり、「自分もやれるところまで頑張ろう」という気持ちになります。以前、勤務の継続が難しい状況になった際には、「もう辞めなければならないのだろう」と思っていた私の気持ちを汲み取り、「やれるところまで協力しますので、少しだけ時間をください」と声をかけてくださいました。常に私の状況を理解し、気持ちに寄り添ってくれるので、安心してお任せすることができます。

Vol.XXX アカデミックスキルと大学図書館：より良い学習支援のために

■ アカデミックスキルとは何か？

アカデミックスキルは、大学で学習や研究を進める上で必要となる、基礎的な技術の総称です。高校までの受動的な学習とは異なり、大学では学生自身が能動的に課題を見つけ、情報を集め、考察し、その成果を表現する力が求められます。この一連のプロセスを支えるのがアカデミックスキルであり、具体的には「聞く」「読む」「調べる」「考える」「議論する」「書く」といった能力が含まれます。中でも「調べる」スキルは、論文やレポート作成の質を大きく左右します。そして、この「調べる」スキルで情報収集を行う上で、大学図書館は欠かせない役割を担っています。

■ 変化する情報収集のスタイルと大学図書館の役割

大学図書館は、学術情報を体系的に収集・整理し、学生に提供する「学術情報基盤」です。かつては、書店では手に入りにくい専門的な学術情報の多くが紙媒体で提供されており、学生にとって図書館は唯一無二の情報源でした。対して、インターネットの情報は匿名性が高く、内容の更新も容易なことから、信頼性に問題があるものが多く、情報源としては適切でないと考えられていました。

<大学図書館に所蔵している主な紙媒体の情報>

種別	説明
参考図書	辞書や事典、文献目録、データブックなど。課題を見つけた際に最初に確認する情報。調査対象の定義、先行研究の確認、信頼性の高いデータの参照などに活用される。
図書(単行本)	1冊または複数冊で完結する書籍。大学図書館では教養書や専門書など、信頼性の高い資料を中心に所蔵。娯楽性の高い読み物は少ない。
新聞	一般紙、産業紙、業界紙、海外紙などを所蔵。時事問題や専門分野の最新情報を得るために活用される。
一般雑誌	教養を目的としているため、趣味や娯楽を扱う雑誌は少ない。速報性は高いが、内容の吟味が不十分な場合があり、信頼性には注意が必要。
学術雑誌	学会誌や大学、研究機関の紀要など。特に査読付き論文は速報性と信頼性の両面で高く評価される。

しかし、近年ではインターネットの普及やオープンサイエンスの進展により、電子媒体の学術情報が増加し、学生は図書館に足を運ばなくても、自宅で手軽に情報を得られるようになりました。こうした環境の変化に伴い、入手した情報を有益に活用するためには、その信頼性を確認することが重要となり、情報の出典をたどるなど、裏付けを取る作業が求められるようになっています。

例：Wikipediaの活用

- 以前の考え方：信頼性に疑問があるため、レポート作成には不向きとされていた。
- 現在の考え方：批判的考察の出発点として利用できる。記事中の脚注や参考文献を手がかりに、さらに信頼性の高い情報源をたどることが推奨されている。

このような変化を受け、最近のアカデミックスキル関連の書籍でも、情報収集の章でインターネットの利用法が紹介され、図書館の役割は後半で簡潔に触れられる傾向にあります。しかし、すべての学術情報が電子化されているわけではありません。また、無料で手に入る情報には信頼性に欠けるものが多く、正確な情報を得るには図書館が所蔵や契約をしている専門的な資料が必要となる場面が今もなお、多くあります。

■ 学生支援のための図書館の取り組み

情報が溢れる現代において、図書館は単なる「調べるための場所」や「情報の倉庫」だけではなく、学生の学習を多角的にサポートする場所へと進化しています。図書館員は、情報収集に悩む学生に対して、以下のよう支援を提供しています。

1. 間接的な支援（環境整備）

- 学部の専門分野に応じた情報の整備
- 必要なデータベースの契約
- ラーニングコモンズなどの学習スペースの提供

2. 直接的な支援（個別対応）

- 基礎文献や関連情報の紹介
- 効果的な情報検索方法の指導
- 文献管理ツールの操作支援
- 所蔵していない情報を他機関から入手する相互協力

さらに、図書館単独ではなく、他部署や教員と連携した「アカデミックスキル支援」も進んでいます。図書館内のラーニングコモンズで大学院生が学部生のライティング指導をしたり、図書館員が初年度教育の授業内で情報検索の基本をレクチャーしたりといった取り組みも行われています。

■ まとめ

大学での学習は、自ら課題を見つけ、情報を収集・分析し、成果を表現する能動的なプロセスです。そして、図書館はその学びを支える重要な拠点として、今も昔も変わらず存在しています。情報の在り方が大きく変化する現代においては、図書館員は専門的な知識だけではなく、学生一人ひとりに寄り添いながら支援するコミュニケーション能力がますます求められています。

学生がより質の高い学びを得られるよう、今後のさらなるスキルアップを目指してください。

- <参考資料>
- 市古みどり編(2014)『資料検索入門：レポート・論文を書くために』慶應義塾大学出版会
 - 学習技術研究会編(2019)『知へのステップ：大学生からのスタディ・スキルズ』(第5版)くろしお出版
 - 佐藤望編(2020)『大学生のための知的技法入門』(第3版)慶應義塾大学出版会
 - 初年次教育テキスト編集委員会編(2024)『フレッシュマンセミナーテキスト：大学新入生のための学び方ワークブック』(第3版)東京電機大学出版局
 - 世界思想社編集部編(2008)『大学生学びのハンドブック：勉強法がよくわかる!』世界思想社
 - 世界思想社編集部編(2021)『大学生学びのハンドブック：勉強法がよくわかる!』(5訂版)世界思想社
 - 前野博編(2023)『アカデミックスキルが学べる情報リテラシーテキスト』同友館

■Information

施設見学セミナー

「京都国際マンガミュージアム」開催のお知らせ



キャリアパワー主催施設見学セミナーを開催いたします。

日 時 2025年11月21日(金)
14:00 ~ 16:00

場 所 京都国際マンガミュージアム
604-0846 京都府京都市中京区烏丸通御池上ル
(元龍池小学校)



詳しい応募方法などは
左記QRコードをご覧ください。

<https://www.careerpower.co.jp/service/libraryfair2025-2/>

■Information

第7回 私の図書館(本)川柳コンテスト 最終投票を実施中

キャリアパワーが主催する第7回「私の図書館(本)」川柳コンテスト。全国から寄せられた約3,090句の応募作品の中から、見事予選を通過した13句を現在HPにて公開しています。今年も、図書館総合展にご参加の皆様とオンライン投票により、最優秀作品を決定いたします。ぜひご参加ください!

あなたの投票で最優秀賞が決定!

投票期間 2025. 10/8(水) ~ 11/24(祝)



昨年の入賞作品は
左記QRコードからご確認いただけます。

<https://www.careerpower.co.jp/service/senryu2024result/>



■Information

おかげさまで

Vol. 100

Capo創刊100号記念号を発行しました

2024年、Capoはおかげ様でVol.100号を迎えることができました。
創刊100号を記念して、100号を発行しました。

<https://www.careerpower.co.jp/wp/wp-content/uploads/2025/04/Capo100thAnniversaryIssue.pdf>



■Information



バックナンバーをご覧いただけます

キャリアパワーホームページから、Capoのバックナンバーをご覧いただけます。
紙版のバックナンバーもございます。ご入用の方はお申し付けください。

TEL 075-341-2929 <https://www.careerpower.co.jp/capobn/>



■Information

第23回 京都学生祭典を応援しました



今年で23年目を迎える京都学生祭典。2025年10月12日(日)、平安神宮前 岡崎プロムナード一帯で開催された第23回京都学生祭典本祭は、多くの来場者で賑わいました。キャリアパワーは、2003年の第1回から継続してこの京都学生祭典を応援しています。

今年のテーマは「袖触れ合うも生の縁 "Every Encounter is Destiny"」。個性豊かな踊りや音楽、食を通じて、学生と地域、そして未来をつなぐ一日となりました。当日は、「京炎そでふれ!コンテスト」や「Kyoto Student Music Award」、「全国おどりパフォーマンス」など、多彩なステージ企画が実施され、学生たちの熱気あふれるパフォーマンスが会場を大いに盛り上げました。キャリアパワーは、今後も未来を担う学生・若者の活躍を引き続き応援してまいります。

■Information

第27回 図書館総合展に出展しました

2025年10月22日～24日にパシフィコ横浜で開催された図書館総合展に出展し、キャリアパワー主催のフォーラム「大学におけるマンガ収集の意義と挑戦」を開催しました。今年のフォーラムは、現地会場とオンラインによるハイブリッド形式で実施。多くの図書館関係者の皆さんにご参加いただき、おかげさまで大盛況のうちに終了しました。



オンラインブースは
左記QRコードから
ご確認いただけます。

<https://www.libraryfair.jp/booth/2025/250>



法令順守委員会

キャリアパワーは、労働者派遣法や労働基準法など各種労働法令を遵守し、常に適正な事業運営を果たすために、社内に法令遵守委員会を設置しています。定期的に派遣先を巡回、また社内監査を行ないながら、派遣契約内容を改めて見直し、法令の遵守が出来ているかの再チェックを行なっています。また、全社員に対して法令知識向上とコンプライアンス遵守の意識強化のために、定期的に研修会や勉強会を実施し、コンプライアンスの課題解決や事前防止の徹底を図っています。遵法精神を貫くことで、当社で働く派遣労働者、そして人材派遣を利用される全ての派遣先企業様に、よりいっそう満足して頂ける様、活動を行なってまいります。

派遣コンプライアンスに関する問い合わせ先

TEL 075-341-2929

MAIL support@careerpower.co.jp

キャリアパワー各支社へは ☎ 0120-154-450 にお気軽に問い合わせください

東京 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-7-2 東京サンケイビル15F
大阪 〒530-0001 大阪府大阪市北区梅田1-12-17 JRE梅田スクエアビル2F
名古屋 〒450-0002 愛知県名古屋市中村区名駅3-25-9 堀内ビル8F
京都 〒600-8216 京都府京都市下京区塙小路通烏丸西入東塙小路町843-2 日本生命京都ヤサカビル4F
滋賀 〒525-0037 滋賀県草津市西大路町2-5 Nビル5F
システムセンター 〒600-8269 京都府京都市下京区七条通堀川西入西八百屋町160

TEL 03-6895-2929 FAX 03-6895-2911
TEL 06-6346-2929 FAX 06-6345-1268
TEL 052-563-2929 FAX 052-563-3511
TEL 075-341-2929 FAX 075-341-3828
TEL 077-516-2929 FAX 077-516-2930
TEL 075-344-6776 FAX 075-344-6780

発行
株式会社 キャリアパワー
企画 / 制作
株式会社 キャリアクリエイト
2025年12月発行